

科学研究費助成事業 研究成果報告書



令和 4 年 8 月 9 日現在

機関番号： 1 3 7 0 1
研究種目： 奨励研究
研究期間： 2021 ~ 2021
課題番号： 2 1 H 0 4 1 8 0
研究課題名 周術期のせん妄対策の確立およびその評価

研究代表者

西田 承平 (Nishida, Shohei)

岐阜大学・医学部附属病院・薬剤師

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 470,000 円

研究成果の概要：当院ではせん妄の原因となると言われているベンゾジアゼピン系薬の使用を減らすために、クリニカルパスや医師による周術期の指示を見直し、ベンゾジアゼピン系薬以外のものに変更しました。また、全職員対象の医療安全講習会を活用し職員の教育も行いました。2020年度では経口睡眠薬の処方があった患者は62.6%と多かったものの、取り組みを開始した2021年度では39.2%と使用患者を減らすことができました。また、新規導入患者は2021年4月の時点では56.1%であったのに対し取り組み後の2022年3月では23.7%と減少させることができました。せん妄の発生状況がどのようになったかについては現在調査継続中です。

研究成果の学術的意義や社会的意義

せん妄は急激に進行する意識障害であり、注意力や思考力が低下したり、自分のいる場所がどこかわからなくなってしまう。せん妄となると、自分の体についている点滴の管を引き抜いてしまったり、安静にしていられなかったりするため、本人にとっても、医療スタッフにとっても危険な状態になります。特に手術後のせん妄は危険であり、せん妄を手術後に起こした人はそうでない人と比べて2.5倍死亡の危険が高まるとの報告があります。せん妄を防ぐための方法論が確立すれば、医療の安全向上に大きく貢献できると考えられます。

研究分野： 医療薬学

キーワード： せん妄 ベンゾジアゼピン系薬 オレキシン受容体拮抗薬

1．研究の目的

せん妄は急激に進行する意識障害であり注意力、思考力の低下、見当識障害、意識レベルの変動を特徴とする。発生頻度は10%程度から50%程度まで報告にばらつきはあるが、術後せん妄は周術期に最も問題となる合併症のひとつである。術後せん妄が発生した場合には安静保持困難、点滴やカテーテルの自己抜去等の危険行動等、患者に危険があるのみならず、多くの医療資源の投入を必要とする。せん妄を起こした患者の死亡リスクは約 2.5 倍上昇するという報告もあることから(Morandi A, et al. J Gerontol A Bio Sci Med Sci. 2019)、せん妄の発生を抑制することは非常に重要である。

せん妄の発生リスクを上昇させる要因としては、薬剤の使用、年齢や併存疾患、認知機能障害等、様々な要因が報告されている。薬剤の中でも本邦でのベンゾジアゼピン系薬剤の使用量は海外と比較して多く、一般的に周術期でも用いられている。一方で、睡眠薬の中でもオレキシン受容体拮抗薬のスボレキサントはプラセボと比較した場合にせん妄の発生率を低下させることが報告されている(Kotaro H, et al. J Clin Psychiatry. 2017)。しかしながら、実臨床で行われた睡眠薬の使用状況とせん妄発生の関連についての検討は少ない。

本研究では、術後せん妄のリスク因子を明らかとし、せん妄を減らすことで医療安全の向上に寄与することを目的とした。

2．研究成果

岐阜大学病院ではベンゾジアゼピン系薬を含むクリニカルパスおよび周術期の医師による指示を見直し、ベンゾジアゼピン系薬を含むものを抽出しオレキシン受容体拮抗薬(レンボレキサント)を含むものと変更を行った。また、医療安全講習会を活用し周知を行った。岐阜大学医学部附属病院において2020年度では経口睡眠薬の処方があった患者が3313名であり、そのうちベンゾジアゼピン系薬の処方があった患者は2073名(62.6%)であった。介入後、徐々にベンゾジアゼピン系薬の使用量は減少し、2021年度は睡眠薬の処方があった患者は累計3641名であり、ベンゾジアゼピン系薬を使用した患者数は1429名(39.2%)まで減少した。また、新規導入患者は2021年4月の時点では睡眠薬使用患者508名のうちベンゾジアゼピン系薬を開始していた患者は285名(56.1%)であったのに対し、取り組み後の2022年3月では睡眠薬導入患者285名のうちベンゾジアゼピン系薬を開始した患者は68名(23.7%)と低下を認めた。せん妄の発生状況の変化およびせん妄発生の要因については現在調査継続中である。

主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1．発表者名 山田翔也、西田承平、林祐一、浅井奈央、山田未知、藤井宏典、飯原大稔1、窪田創大、加藤丈博、水野正巳、鷹尾賢、廣田卓男、佐 野美佳、境浩康、小林亮、熊田恵介、清水雅仁、矢部大介、鈴木昭夫
2．発表標題 糖尿病代謝内科病棟におけるポリファーマシー対策の評価
3．学会等名 医療薬学会
4．発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

研究組織（研究協力者）

氏名	ローマ字氏名
----	--------